

## 第8回

## 第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

## アリストテレス ～現実に向き合う～

## 今回学ぶこと

アリストテレスの現実主義とはどのような考え方なのか、プラトンの理想主義と比較しながら理解する。アリストテレスの徳論や国家論を、具体的な事例に即して理解する。そしてその考え方の特徴が、後の時代にどのような影響を与えているのかについて考える。



講師

和田倫明

## ■■ プラトン哲学への批判 ■■

マケドニア王国に生まれ、プラトンの弟子であったアリストテレスは、プラトンの理想主義に対して、現実主義の思想家だった。プラトンは、永遠不滅のアイデアを物事の本当の姿だと考えたが、アリストテレスは、この世のものがごとが移り変わっていくのは、物事を形作っている質料（ヒュレー）の中に、やがて実現されるあり方である形相（エイダス）があって、その物事が持っている可能性を、より高い目的に向かって次々と実現していく運動なのだと考えた。

プラトンのように、移り変わる現象界を不完全で劣ったものとするのではなく、その移り変わりにこそ意味があるというのがアリストテレスの立場である。

## ■ ポリス的人間の生き方 ■

アリストテレスは徳をまず知恵などの知性的徳と、勇気や節制などの倫理的徳（習性的徳）に分ける。知性的徳は多ければ多いほどよいのだが、人間が実践的生活を送る上で必要な、さまざまな倫理的徳は、何かの性質について程良い中ほど（中庸）に成り立つ。例えば、勇気の徳は、恐怖心の過少である無謀と、過多である臆病との間の中ほどに成り立つ。

アリストテレスは「人間はポリスの動物である」というように、ポリスで生きる人間として正義と友愛を重視した。正義はソクラテスやプラトンが求めた「全体的正義」ではなく、ポリスで暮らす人間の「部分的正義」として、配分的正義（働きに応じて得られること）と調整的正義（取り引きにおいて均衡がとれていること）とを論じた。友愛は、相手の幸福を互いに自分の幸福と感じ、そのことを互いに知り合っていることで、もし国民すべてが友愛で結ばれていれば正義はいらない。しかし現実主義者のアリストテレスは、友愛は極めてまれにしか成立しないとして、正義の必要を説くのである。

## ■ アリストテレス哲学の特徴 ■

国制についても、プラトンが哲人政治を理想としたのに対して、アリストテレスは現実のさまざまな国制の研究を通じて、理想の王制も最悪の僭主制に、すぐれた人々数人が行う貴族制も寡頭制に転じてしまうので、悪くなっても衆愚制にとどまる、多数者による共和制にしておくべきだという。

このように、あらゆることにおいてまず現実世界のものごとを丹念に調査して、実例をもとに筋道だてて考えていくところに、彼の哲学の特徴がある。

### ◇ コラム ◇

アリストテレスは自然学の著作が多い。膨大な生物の生態を記述した『動物誌』の中で、ウニを詳細に観察しその口を「皮を貼っていない提灯」に似ていると言ったので、後の学者がこれを「アリストテレスの提灯」と命名した。『気象論』では多くの自然現象について考察しているが、地震が起こる原因を、風が大地の下を流れるからとしている。これは間違っているのだが、どんなときに起きるか、どんな前兆があるか、など多くのデータを集めて推論している（今日でもよく話題になるいわゆる「地震雲」についても記述がある）。地震の原因については、18世紀の哲学者カントも地下の空洞にたまったガスと論じているから、アリストテレスの見解は長く影響を持ち続けていたかもしれない。